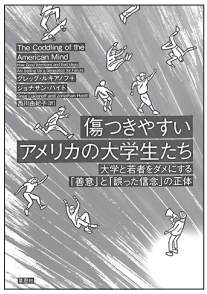
一人一冊



傷つきやすいアメリカの大学生たち
――大学と若者をダメにする
「善意」と「誤った信念」の正体
ジョナサン・ハイト、グレッグ・ルキアノフ 著／**西川由紀子** 訳
草思社（2022年11月）本体1,600円＋税／384ページ

評者

津田塾大学
学芸学部 教授
西川 賢

Z世代における他者理解の乏しさ

「米国社会の分断」という言葉を聞いて、何を想像するだろうか。「トランプに熱狂する過激な共和党支持層が差別的な言動を繰り返し、米国を分断している」――こういうイメージを抱く日本人は多いのではないだろうか。

本書の著者が扱う分断の「舞台」は、なんと米国の大学である。米国の大学では、学生が自分と考え方の異なる講演者の大学キャンパスでの講演を暴力で阻止する、学生が教員の言葉尻を捉えて糾弾し辞職に追い込むといった出来事が、続発しているという。例えば、右派の講演者がキャンセルされれば、大学外の右派勢力は大学や学生を偏向していると批判する。そうすると、学内の学生たちは、さらなる実力行使を辞さなくなるという悪循環がある。しかし、なぜこのようなことが起きているのか。

著者によれば、これには複雑かつ複数の要因が作用しているという。第一に、人には自分が所属する集団の人間を贔屓し、他の集団に属する他者を敵視する傾向が備わっている。近年の米国では、自らのアイデンティティーを中心にものを考える人々が増えており、自らに近いものを「味方＝善」、他の集団に属する人を「敵＝悪」とみる傾向を増幅させている。加えて、１９８０年代から米国政治の二極化が進み、人々の価値観が保守とリベラルに偏り、中道派が消失したことも、前述の善悪二元論に拍車をかけた。

第二に、米国の親たちが犯罪を恐れたり教育に力を入れすぎたりするあまり、子供を潜在的に危険と考えられるものから遠ざけて、過保護に育て過ぎることも大きいという。結果、子供は他の子供と交わって自由に遊ぶことなく、他者を理解する機会が乏しくなり、外界の刺激に非常に脆弱になってしまうという。

これらの子供らは他者からの攻撃と解しうるものなど、自らの安全を脅かすと思われるものを見つけ出し、それらを除去することに夢中になる。こうした人々が行動の指針とするのは「感情」のみで、そこに「理性」が作用する余地はないとも指摘される。この傾向はZ世代（１９９０年代後半から２０１２年頃生まれ）と呼ばれる若者で特に顕著という。情報を選別して手元に届けるスマートフォンの利用が、この傾向に拍車をかけ、この世代の若者は鬱や不安症に苦しむ程度が高い。

米国の大学に勤務する著者は、教育の場であるはずの大学が、闘争の場と化しつつあることを憂いている。